

風の木の風

之作・花園大学
美之たあまのこ



たのんでみても、だめだと思っただが、おれは、たのんでみないではいられなかった。

たのんでみると、やっぱりだめだった。

父は、こわい顔をして、

「ぜいたくなことをいうな。子供用の自転車が買えるほど、うちのくらしがらくだと思っっているのか。

ばかめ！」

と、どなった。

らくだとは思っていない。だが、なにもそう、が
みがみ怒らなくともいいではないか。

おれは、腹がたった。おれは、口の中で、

「おっとうのケチンボー！」

と行って、うちをとびだした。



それから、おれは、すぐ、自転車のことなど、あつさりあきらめた。

その日は、夏祭りの日だった。

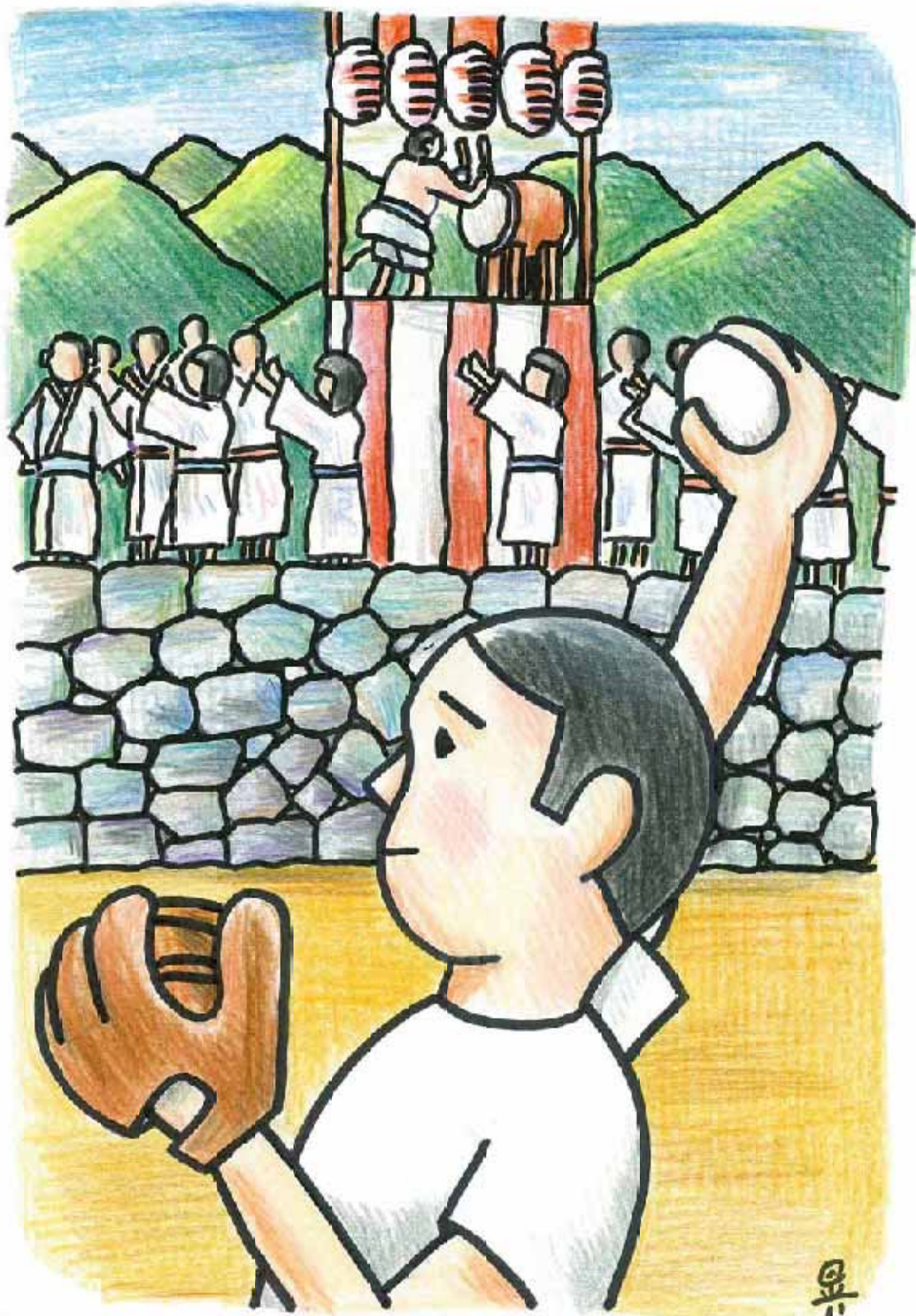
おとなも子どもも、みんなあそんでいた。

おれは、いつもみんなのあつまっている、県道わきのねむの木広場へ、走っていった。

みんな野球をしてあそんでいた。

おれは、すぐ、正作と投手交替して、がむしやら

に投球しつづけた。



するとそこへ、五郎が、新しい自転車にのって、
やってきた。

すんだ音のするベルを、わざとならした。

おれたちはびっくりして野球を中止し、五郎をと
りかこんで、きいた。

「これ、お前買うてもろうたんか」

「あたりまえじゃ」

と、五郎はとくいになつていった。

「おっとうがボーナスをもらったので、その金で買ってくれたんや、おっとうは、おれのいうことならなんでもきいてくれる」

五郎の父は、電車の線路工夫だった。

家は小さいし、田も畑もない。

くらしは、らくでないときいている。

だが五郎の父は、くらしのことなどいわないで、すばっと自転車を買ってやるなんて、えらいもんだ

と、おれは、へんにむしゃくしゃしてきた。

おれは、ピカピカ光る自転車を、なめるようにながめまわしながら、そのむしゃくしゃするやつを、じつところらえていた。

そしてしきりに、

「おれのところのおっとうは、百姓だから、どこからもボーナスなんかもらわれへん。だからしようがないのや」

と、自分いいいきかせた。

そうすると、胸がどうやらおさまりかけた。

と、そのとき、正作が五郎に、

「あとで、おれに、ちよつとのせてんか？」

と、いって、たのんだ。

昭夫も新一郎も、頭をさげてたのんだ。

五郎はいばって、

「よっしや」

と、いった。

おれは、五郎の女みたいに、ぐにやぐにやしたところが大きらいだった。

だからへいぜいから、なかがよくなかった。

それでおれは、どうしようかとまよったが、やっぱりのせてもらいたくてならなかった。

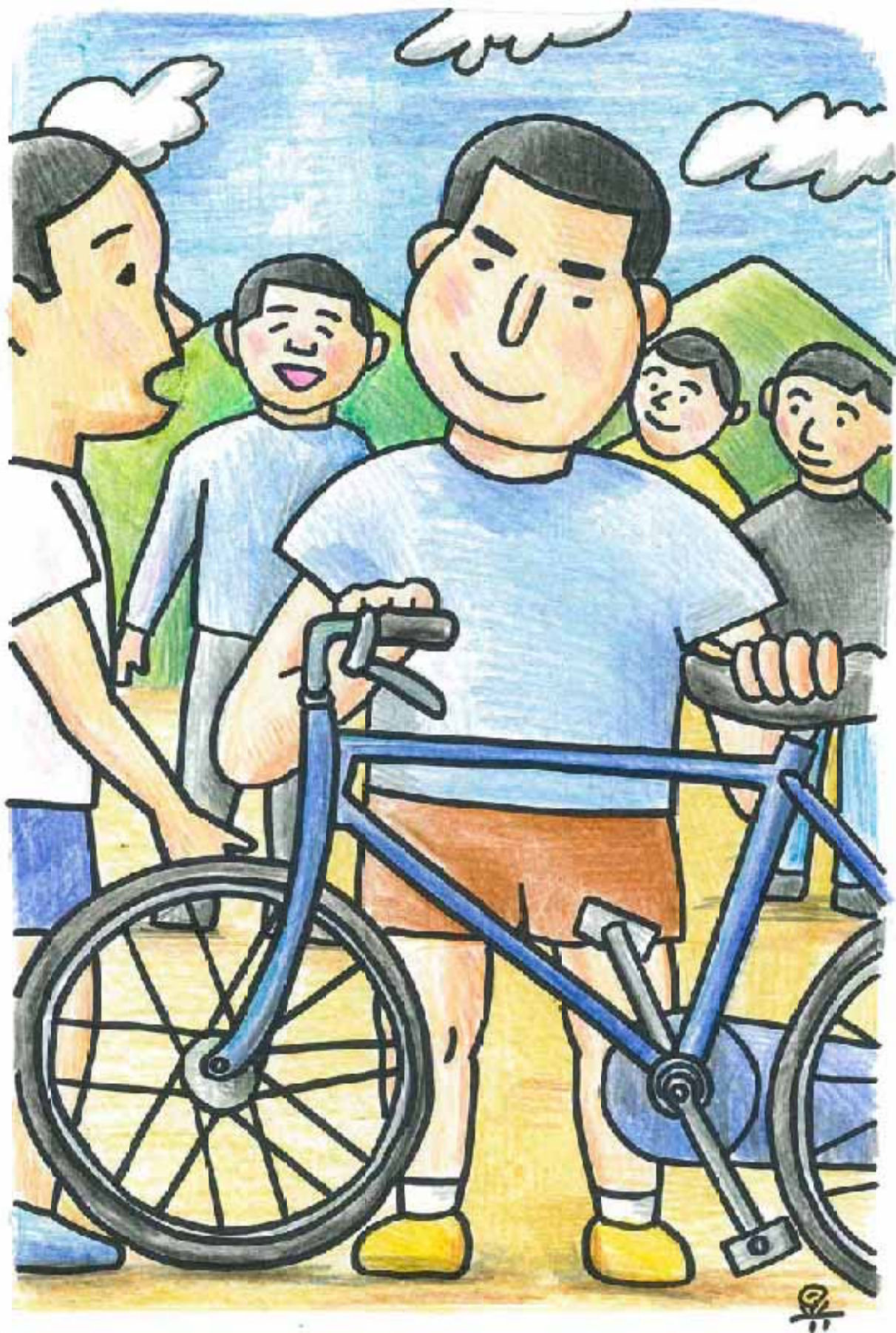
おれは、いちばんあとから、そつとたのんでみた。

すると五郎は、つめたい眼をして、

「お前にはかしてやらん」

と、いった。

おれは、ムツとした。だがどうすることもできな
かった。おれは、ぶるぶるふるえた。それから泣き
そうになってきた。

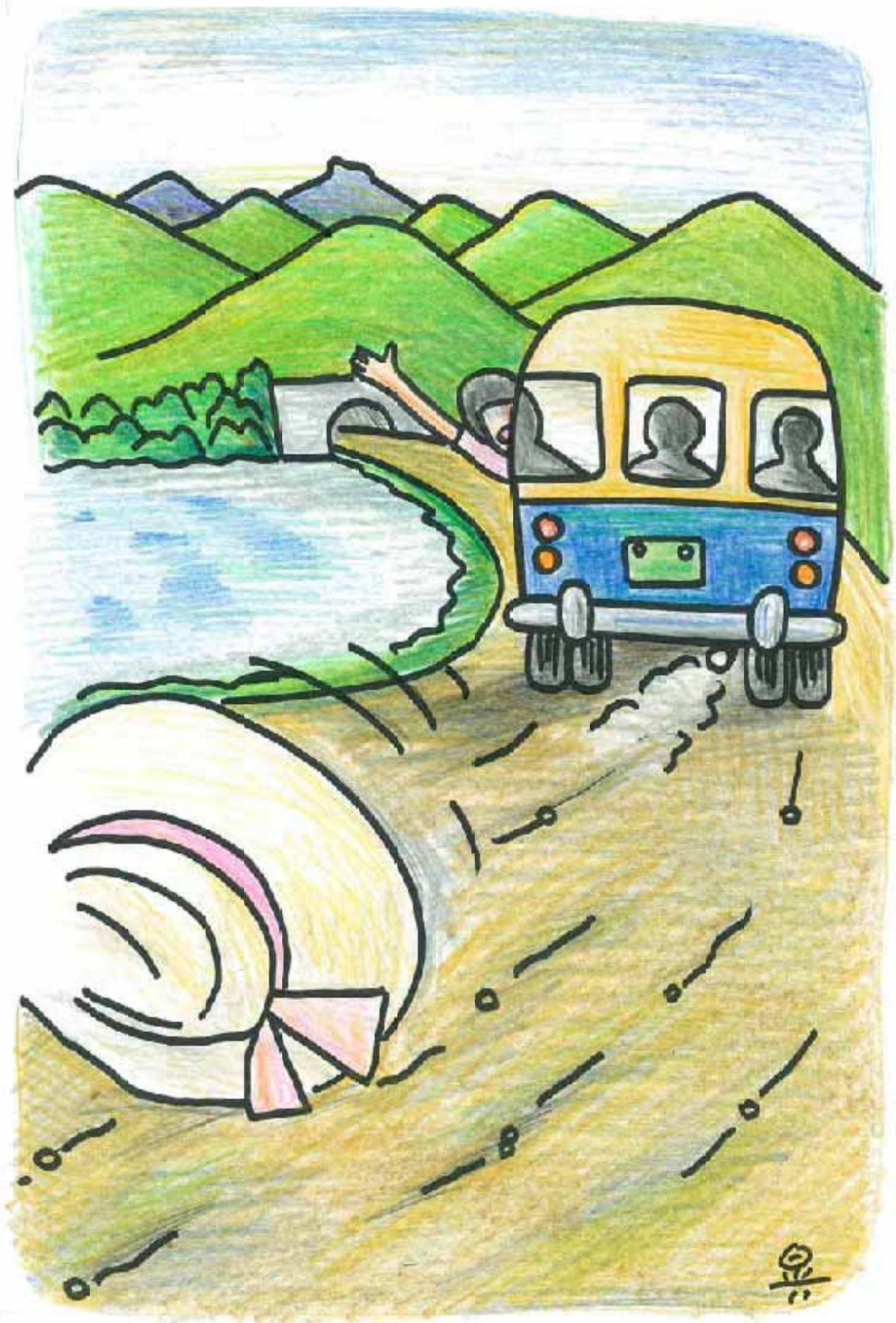


ちようどよいことに、そのとき大型のバスがとおりかかってきた。

おれたちは道のかたわらへよけて、バスを通してやった。

バスのまどから、女の子がいつぱいのぞいた。

その女の子のなかの一人が、そのとき帽子をとばせた。



帽子は、ふわっととんで、風にあふられて、泥田のなかへ、おちた。

それをみると、なぜかおれは、はじかれるように泥田のなかへ、ピチャピチャとびこんで、その帽子をひろってきた。

泥まみれの足で、おれは五郎に、

「おい、ちよつとのま、自転車をかしてくれんか」と、たのんだ。

五郎は、

「いらん！」

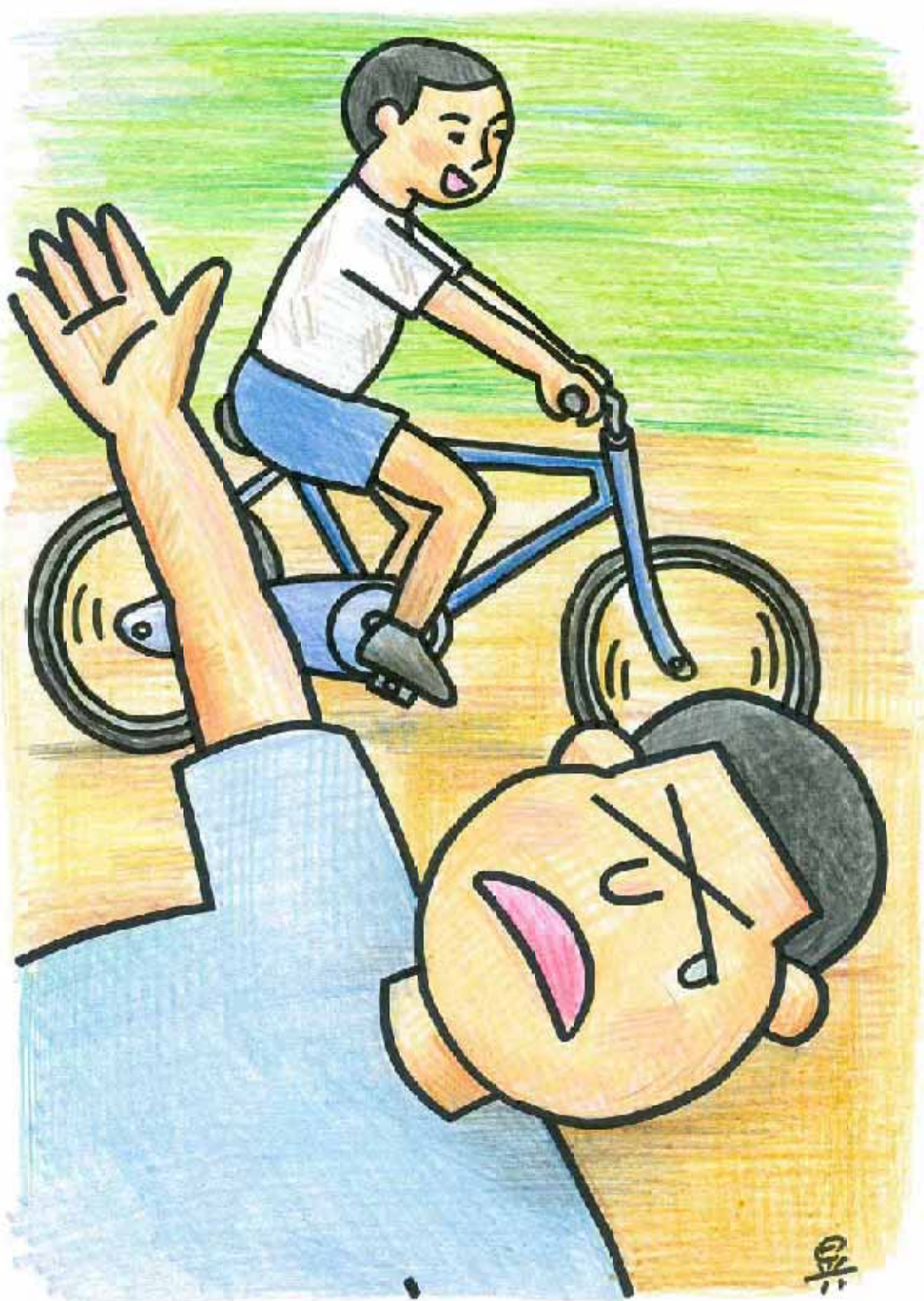
と行って、自転車にしがみついた。

おれは、いきあり五郎をつきとばした。そしてすばやく、その自転車をうばった。

五郎は、わっと泣いた。

だが、おれは、こんなにいるがねばならない場合、五郎が泣いたりするのは、まちがっていると思った。

それでおれは、自転車にとびのると、あわててバスのあとをおっかけた。



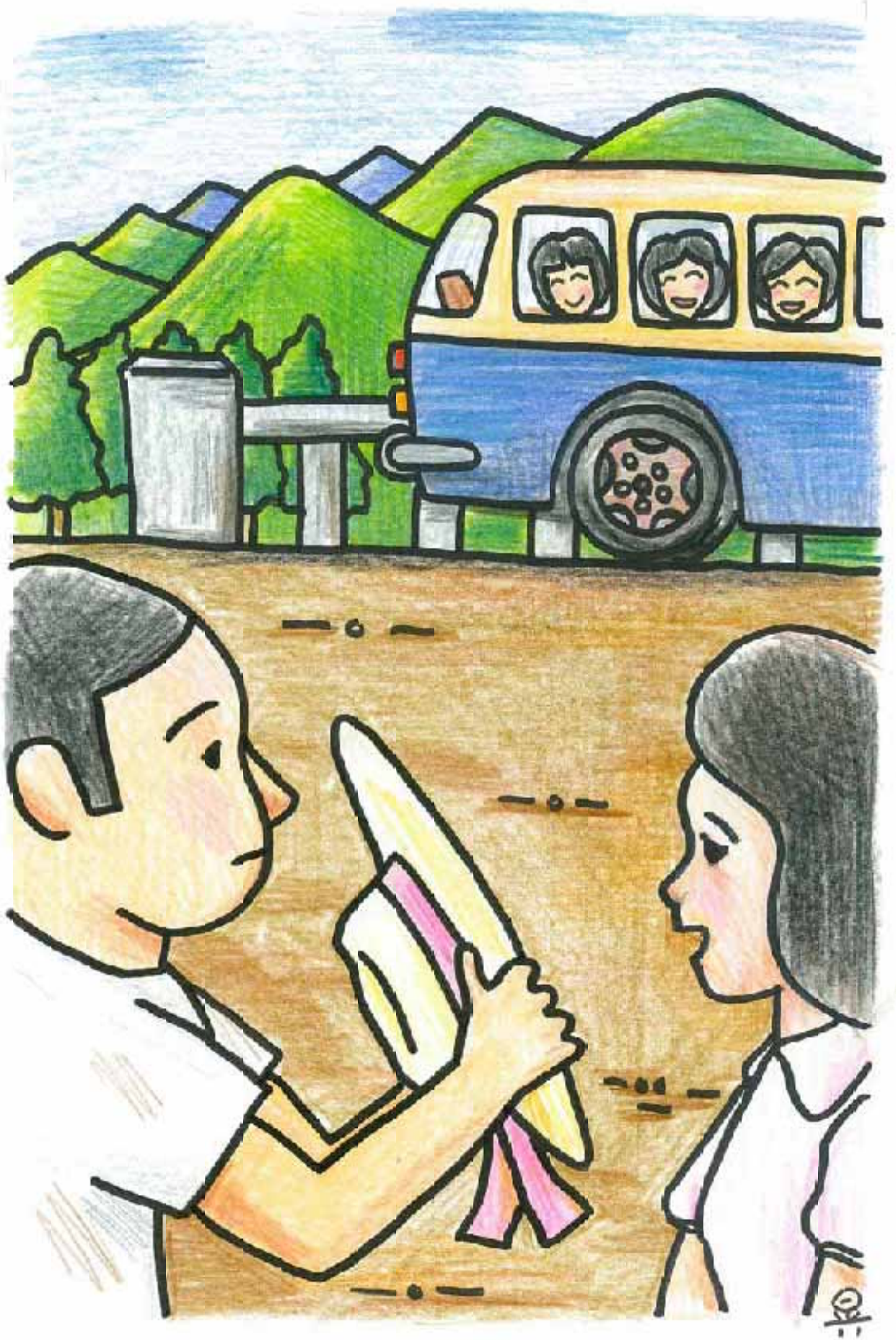
バスは、橋の向こうで止まっていたので、おれはすぐ追いついて、無事にその帽子を女の子にとどけることができた。

ちよつと考えると、とんだ帽子を、おれが、なぜそんなにあわててとどけなければならなかったのか、わけがわからなかつた。

わからないが、しぜんそうせずにはいられなかつたのだから、しようがない。

とにかくおれは、なんかしらホツとしたのだから、
それでいい。

バスは、いつてしまった。



おれは、くちぶえをふきながら、ひきかえしてきた。

ところが、かえっててくると、もとのところに、五郎の父やおれの父やおおぜいのおとなたちがあつまって、がやがやいていた。

そして、おれが自転車からおりると、おれの父は、つかつかつとおれのそばへきたかと思うといきなり、おれの顔をパチンとなぐりつけて、どなった。

「たのまれもせんことを、ちよかちよかしやがつて、五郎とこのおっとうは、かんかんに怒ってやはる。さあ、はよ、おっちゃんにあやまれ！」

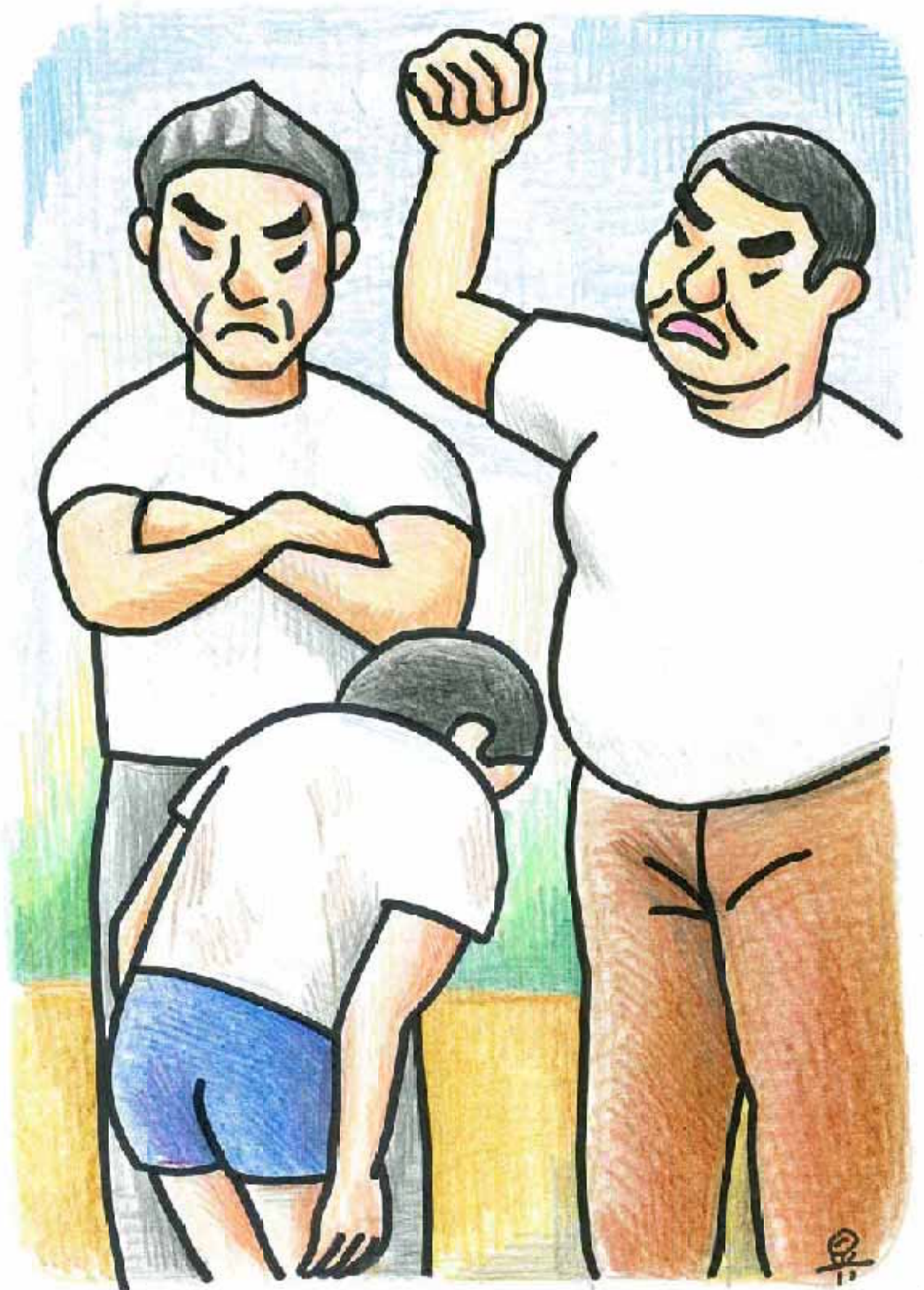
おれは、びっくりして、父の顔をみた。

おれは、不服だったのだ。なさけなかった。

だが、おれはいわれるままに、

「おっちゃん、わるうございました。すみません」
と、あやまった。あやまりながら、おれは、あの父

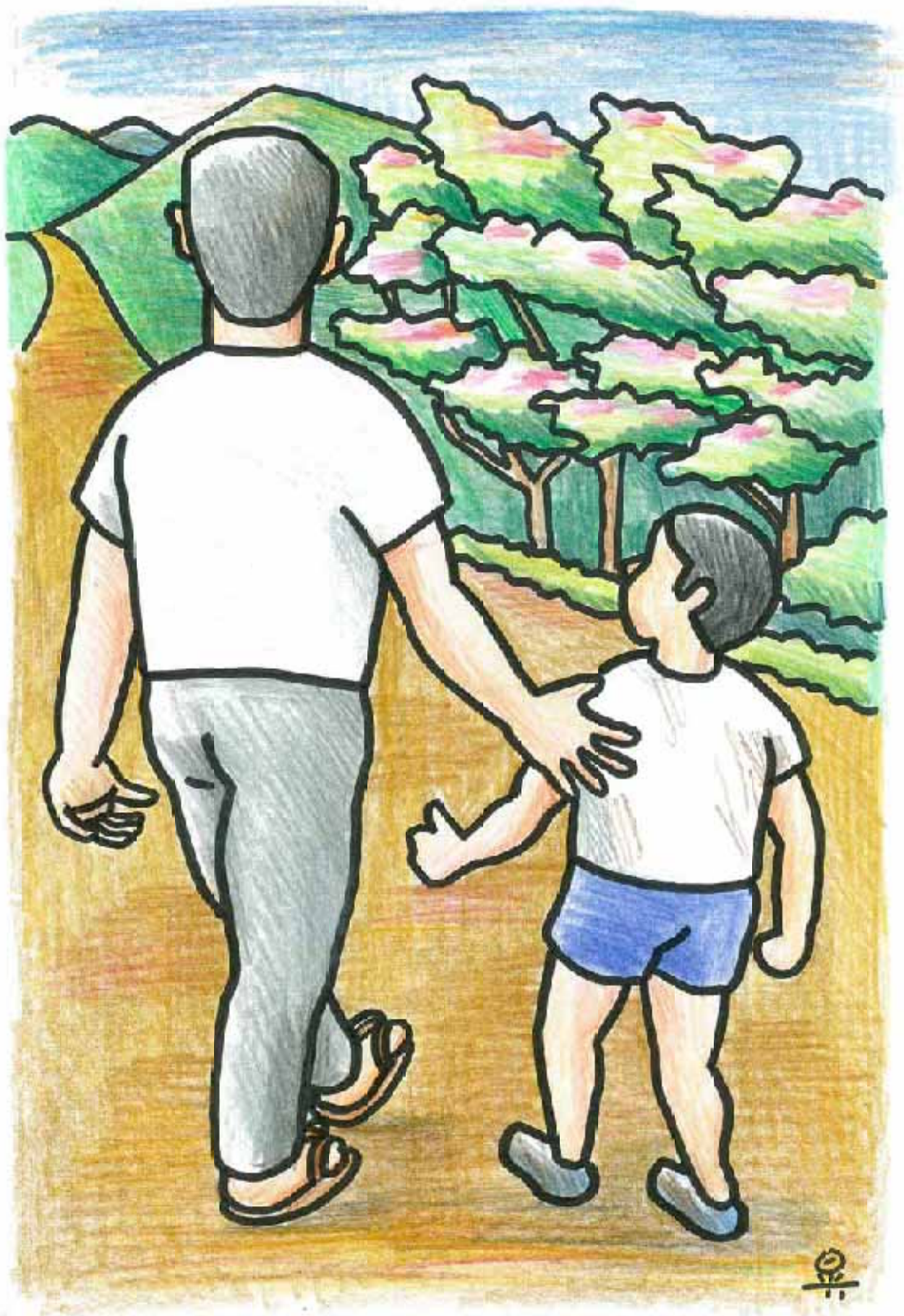
の顔は、けっしてあれは、ほんとうに怒っている顔
ではなかったと思った。怒りながら、ちっとも怒っ
ていない顔だ。



「自転車は、いそぐときにのるもんだ、なあ、お
っとう」

と、おれは、心の中で、父に話しかけて、にっと
笑った。

父は、だれにもたのまれないことをした、おれの
ことを、ちゃんとわかってくれているに違いないと
思った。たしかに、そんな怒っている顔だった。



自転車など買ってくれなくとも、五郎の父よりおれの方か、うんといいい父だと、おれは思った。

なんだかおれは、うれしくてたまらなくなつた。

ねむの木広場のねむの木の葉っぱをゆきぶつて、さやさやと風がふいていた。

からりと空は晴れ、祭りの太鼓が、その空へのんびりとひびきわたっていた。